

心優しき

サンデー毎日の70年

戦士たち

畑山 博

心優^{しき}

サンデー毎日の70年

戦士^{たち}

畑山 博

心優しき戦士たち

—「サンデー毎日」の70年

一九九二年三月二五日 印刷
一九九二年四月一〇日 発行

著者 畑山 博

編集人 深瀬 正頼

発行人 戸田 栄輔

発行所 毎日新聞社

〒100-8555 東京都千代田区一ツ橋

〒550-0853 大阪市北区堂島

〒830-0833 北九州市小倉北区紺屋町

〒440-0805 名古屋市中村区名駅

印刷 凸版印刷
製本 大日製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえます。

© Hiroshi Hatayama printed in Japan 1992
ISBN4-620-30856-0

心優しき戦士たち

目次

関東大震災	7
創刊秘話	42
ガラス窓の男たち	60
室戸台風	77
日中戦争	95
屈辱の時代	113
太平洋戦争	130

それぞれの人生

147

焼け跡の合奏

163

全盛時代の罨

179

マスコミ魂

195

神になりたき人々

212

タブーへの挑戦

229

あとがき

252

心優しき戦士たち――「サンデー毎日」の70年

装
幀

コ
ス
ギ
・
ヤ
エ

関東大震災

1

大正十二年九月一日。土曜日だった。大阪は堂島にある毎日新聞本社二階、編集局。校了明けが遅くなったため、前夜家に帰れなかった二人の記者が、仮眠をとっていた。学芸部編集課長で、サンデー毎日の実質編集長格だった深江彦一と、大野木繁太郎だ。

校了明けには、この二人は、よく明け方、将棋を指す。徹夜で疲れきった目に目薬をさしながら駒を持つと、駒が、えも言われぬしびれる感触で跳ねて、将棋の醍醐味がまた格段に増すというのだ。

が、同僚たちは誰も信じていない。二人の弱さは、社内どころか、界隈の飲み屋、ミルクホールといった溜まり場すべてに知れ渡っていたからだ。

負け惜しみ二人組は、十一時ごろ、いったん勝負を中断して、近くのうどん屋から力うどんの出前をとり、腹ごしらえをした。

それから一服して、布張りの長椅子に寄りかかり、テーブルに足を投げ出し、

「そろそろ帰ろうかね」

と話していたときだった。

とつぜん、窓枠や資料ロッカーを激しくがたつかせながら、建物全体が揺れだした。

「大きいぞ。おい」

深江が立ち上がりとうとしたが、足がすべてよく立てなかった。

見上げると、三十幾つある大電灯が、ぶらんこみたいに揺れている。

その段階ではまだ誰も、それが関東大震災の余波だとは気づかなかった。少し大きなローカル地震だと思ったのだ。

最初に叫びだしたのは、東京との電話連絡にあたっていた連絡部の若い記者たちだった。

「電話線が切れたぞ」

「つながる回線はないのか」

「どれも全滅だっせ。何てこっちゃ」

「何が起きたんじゃい。新内閣親任式の顔ぶれ入稿どうなるんや」

騒ぎはたちまち社内全体にひろがった。大阪駅、測候所、中央電信局に記者が飛んだ。

「震源地、伊豆半島。関東に大地震発生」

「東海道線、原、鈴川以東列車不通、連絡途絶」

次つぎに記者たちの報告が入る。輪転機がうなり、号外が出された。が、それ以上には分からない。

「平野郷へ走れ。直接、無線電信局へ行って、東京の海軍省を呼び出せ」

通信部長が叫んでいる。

社会部の主力部員たちは、折から淡路島で発生していた潜水艦沈没事件の取材のために出払っていた。人手の足りない中を次つぎに連絡班が編成されて、名古屋、東京に向かった。富山など地方の通信部へも、東京へ向かえという指令が出された。

潮岬、銚子の無電局、横浜港にいるはずの大型船舶へと手当たりしだいに連絡がとられた。ついには海底電線で上海、グアムを呼べということにまでなった。が、すべては不調だった。

サンデーも非常呼集をかけなければと、大野木が言った。が、深江は、連絡電話のダイヤルを激しく回しながら、

「もう少し待て」

と言った。

「こういう修羅場にこそ、誰か一人^{ひるあんどん}昼行灯がいなきゃならないんだ」

七時、横浜市に大火災起こり、全市炎上中、SOSという電報が中央電信局に着信した。猛火の中を脱出し、港にいた汽船に泳ぎついた神奈川県警察部長からの無電だった。それが潮岬経由で受信されたのだ。

ふたたび輪転機がうなり、号外が出された。

東京も全市倒壊、炎上中という。汽船や軍艦から発信される断片的な情報だけが頼りだった。中央電信局の電話はパンクし、記者たちは局と本社の間を、原稿を書きながら自動車連絡した。頼みの名古屋鉄道局でも苦悩は続いた。東海道線、中央線、信越線、どの鉄道電話も東京との連絡はとれず、列車に飛び乗ったところまでどこまで近づけるのかは分からなかった。

深夜零時。地震発生から十二時間がたった。が、相変わらず東京からは組織立った情報は入ってこない。

「誰か一人ぐらい、東京から脱出して原稿送れる者はいないのか。入稿できるやつは、いないのか」

編集局内は沈痛なふんいきになっていた。

大阪駅から出発する東行きの列車には、ほとんど各列車ごとに通信班の者が乗り込んで、東京を目指した。もう何班も何班も送り出されている。なのに、そのどの班からいまだに何の連絡さえない。

東京、横浜どころか、そのもつとずっと手前に何か得体の知れない暗黒の奈落でも口を開けているのだろうか。そうしてすべてのものを呑み込んでしまうのだろうか。

深江も大野木も、ひっきりなしにかかってくる商社や役所、地方支局からの電話に追われていた。身体のコが重湯になって溶け出してでもしまいそうな疲労感が、全身をひたしていた。

午前中に東京を出発し、沼津付近で震災に遭いながらやっと名古屋まで脱出してきた列車の乗客たちの証言が入り、編集局は色めきたった。

その騒ぎの中で、大野木がふと気がつく、深江の姿がない。

「何ということなんだ。この大事なときに」

昼行灯もいいが、行灯ぶりも度がすぎると怒ったのだ。

午前三時。その深江が、よれよれになったワイシャツの袖にタールをこびりつかせ、頭をぼさぼさにして戻ってきた。

「大野木くん。出発だ」

「えっ？」

と大野木は訊き返した。

「鉄道じゃちがあかん。船の交渉に飛び歩いてきた。じきに大阪築港から貨物船が一隻出るこ
とになった。大阪商船の扇海丸せんかいって船だ」

すぐに、社内で集められるだけのビسケットや缶詰、タオルなどを掻かき集めて箱に詰めた。着
替かえに家に戻っているひまはなかった。

ようやく東の空が明るんできた。

まだ大きな建物のなかった天神橋や片町あたりの家並みの上に、ふだんの朝焼けの色とはちが
う血豆色の気味の悪い筋雲が、浮かびはじめた。

燃える東京の空が、そこまで広がってきているようだった。

背伸びをすれば、燃える東京の地平が見えそうな気がした。

燃えるその地平に向かって、今この大阪の街が、激しく地を掻きむしりながら、吸い寄せられ
てゆくような気がした。

「学芸部員全員に非常呼集だ。一日みんな休んだから、どの部の連中よりもいい戦力になれる
ぞ」

深江は言った。

午前七時。電報で呼び出されたサンデー毎日の編集部員たちが勢揃いした。

各新聞社や市役所、軍関係、商社関係などから沢山の要請があるので、もっと大型の汽船シカ

ゴ丸を回航せるといふ連絡が、大阪商船から入った。

出航予定は午後二時だという。シカゴ丸は、南米通いの定期船で、点検のためにドック入りしていたのを、きゅうきよ就航させることになったのだ。

栈橋は、救援品の木箱や毛布束の積込作業と出航準備の船員たちのあわただしい動きで、戦場みたいな騒ぎだった。

出航までにはまだ大分時間がある。トラックや乗用車が次つぎに着き、新しい物資が降ろされた。ほとんどが食料や医薬品。各銀行や会社、市役所などが、東京の支店、本社、出張所などへ宛てたものだ。

そんな夥^{おほい}しい荷物の中で、縄で縛ったボール箱二つ以外は何も持っていない着のまの自分が、大野木には頼りなかった。

相棒の深江は、しきりに事務所へ行つてはどこかへ電話をかけて、落ちつかなかった。

2

同じころ、午前十時少しすぎ、若手の編集部員前田三男は、芥川龍之介、山田耕柝^{さか}ら在京の執筆者たちの安否を知ろうと、八方に電話をかけまくっていた。

いきなり編集局主事の奥村信太郎が入ってきた。

「おい、誰か乗らないか。木津川尻から、水上飛行機を飛ばせることになったんだ」
そこにいた数人の編集部員たちは、さっと緊張して顔を見合わせた。

たかだか七十年ぐらいしか前ではないのだが、当時飛行機の性能はまだ万全ではなく、大方の者たちは信用していなかった。

まして二百十日。明け方から気になる風が吹きはじめていた。

その中を飛び立って東京上空に着けたとしても、そこは、紅蓮ぐれんの炎と黒煙の竜巻が吹き上げる地獄なのだ。

皆、息をつめていた。

「誰か。深江くんたちは、もう間もなく出航なんだ」

また主事が言った。

「行きましょう」

とっさに前田は答えていた。自分でもどうしてそのとき名乗りをあげたのか分からない。後になつて前田はそのときの気持を、腹の中で爆竹がはじけたような気がしてと証言している。

「頼む。気をつけて行け」

主事は言った。

「話は全部、深江くんがつけてある。木津川尻の水上飛行場だ。日本航空会社の横廠式よこしやうが二機飛び立つ。ライバルは朝日だ。負けるな」

「分かりました」

言いざま、前田は、昼の弁当にと持ってきていたサンドウィッチの包みをズボンの右ポケットにつっこみ、デスクの上のありったけの取材用具とペンシルを左のポケットにつっこんだ。

いったん着かけた上着を、どうしてかすぐ脱いでしまい、鳥打帽をかぶった。

なのに、見ていた女性速記記者羽間甲は、いきなり彼に言ったのだ。

「前田さん、麦藁帽わがわらなんかかぶって、どうするんですか？」

「ハゼ釣りじゃないんだぞ」

別の同僚の北尾が言った。

「あわてている。落ちつかなければ……」

自分に言いかけ、前田は帽子をかぶり直し、ワイシャツにネクタイを締めた。

「飛行服なくて、大丈夫なんだろう。上空はぐっと冷えるんだろう」

石割松太郎編集部長が言った。

「おれの服、重ね着していけ。YOUのより一回りは大きいから」

石割が脱いだ上着を、そこにいた編集部長たち皆で、まるで人形の俵詰みたいにして前田に着せた。

それが東京探訪決死隊員前田の輝く飛行服姿だった。

自動車に飛び乗り、横堀通りを一気に下って、堤防道に出、川尻へ走った。

ライバル、朝日の記者は、木村亮次郎といって、もうすでに着いていた。が、事務所にほかに人影は見えない。ただデスクと電話だけが並んでいる。飛行機も一台も水上に浮かんでいなかった。

「場所違いやろか」

心配性らしい朝日の記者は、しきりに尻ポケットに手をつっこんだ姿勢で、前田の周囲を歩きまわった。